

# 平和をわれらに！

総合人間学部 2 回生 中舛 理玖

## はじめに

2014 年 8 月、小学館からコミックス『平和をわれらに！』（注 1）が刊行された。戦争経験のある 4 人の漫画家、水木しげる、手塚治虫、藤子・F・不二雄、石ノ森章太郎の描く、平和をテーマとした話を抜粋したものである。F 作品で収められたのは「超兵器ガ壱號」「マイ・シェルター」「カンビュセスの籤」「ある日……」（注 2）の 4 編。SF 短編（異色短編）作品の中でも、かなり強烈な布陣だ。筆者も初めて読んだときには、驚きを禁じ得なかった。なんてブラックな内容なんだ！ と。

彼はいったいどういう心境でこの話を描くに至ったのだろうか。そして、彼は戦争をどう思っていたのか。ここでは、いくつかの F 作品から、「藤本弘」という人物が、戦争をどう捉えていたのか簡単に考えていきたい。

加えて注意書きとして記すが、これは筆者の単なる考察であって F 先生の考え方を決めつけるものではないし、筆者自身の思想とも無関係である。ちょっとしたファンの妄想と思って、そのところはご了承をいただきたい。

## 本論

### 1 核戦争の恐怖

終戦時、藤本少年は小学 6 年生だった。戦争そして敗戦が当時の彼の目にどう映ったのか。リアルに経験したことによる精神的影響はけっして小さなものではなかっただろう。実際に、終戦間もない 1953 年に出版された『UTOPIA 最後の世界大戦』の中では、第三次世界大戦が勃発し、氷素爆弾なる新兵器が登場する世界が描かれる。

終戦後も世界が平和になったわけではない。冷戦や現代まで続く中東問題など、世界はたびたび破滅の危機にさらされた。1989 年のマルタ会談をもって冷戦が終結するまで、核戦争というものはすぐに起こり得るものであった（その後もインド・パキスタン問題や北朝鮮など、核の脅威がなくなったわけではないが）。このような緊張した時期に、彼は非常に多くの作品を通して、人類の危機（それも核兵器によるもの）をうたえてきた。たとえば「ある日……」では、突如襲い来る核の恐怖を説いているし、ついに「超兵器ガ壱號」では、巨大な体を持つ宇宙人であるガリバが、原爆をアメリカへと投下してみせる。

## 2 宗教戦争

核のあまりにも暴力的な破壊行為だけでなく、藤本は宗教戦争に代表されるような、思想上の対立についても独自の考えを持った。そして、思想のぶつかり合い(=戦争)について漫画を通して意見を残す。

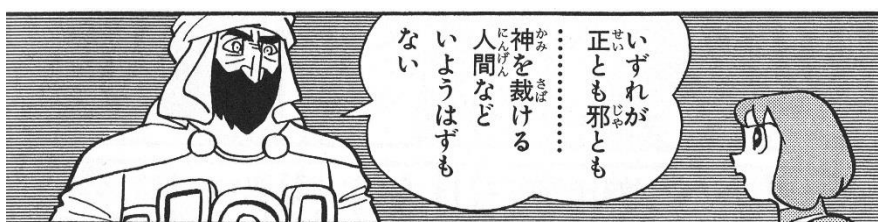
「悪い国がかってなことするからけんかになる。」

「そうかな。戦争してる国は、どっちも自分が正しいと信じてるんじゃないかな。」

「それにどんな国だって、良い人も悪い人も住んでるわけよ。」

「つまりね、「国」という形であちこちかたまっちゃうからいけけないんだ。」(注3)

また、『T・Pぼん』「十字軍の少年騎士」(注4)では、キリスト教とイスラム教の2つの宗教がお互いの正当性を主張するも、話は平行線をたどってしまう。



2人は口論に終着点がないことを悟る。

## 3 軍国主義の否定

宗教戦争の例をみても分かるように、思想は非常に強力な武器となり得る。国のために、とガリバは原爆を投下してみせた。また、「気楽に殺ろうよ」(注5)の主人公は、人殺しが当然となった世界に放り込まれ、戸惑いつつも殺人に意欲をふくらませていく。それらに現れる恐ろしさ・奇妙さは、環境によって彼らの常識が変化しているところにあるだろう。『エスパーマグ』でも、戦時中に常識が変化することの恐ろしさが描かれている(注6)。

このように藤本は、軍国主義による思想変革・統一を戦争の異常さとして認識した。そして、自らの持つ漫画という手段でそれを鋭く指摘しているのだ。

『ドラえもん』「階級ワッペン」(注7)では、軍国主義を皮肉ったシーンが登場する。道具の効果で命



思想の統一の異常さを説く。  
(『ドラえもん』「ココロチョコ」より)

令に従わざるを得ないスネ夫たちが「昔の軍隊は、こんな風にむちゃな命令でむちゃな戦争をはじめたんだね。」と嘆き、のび太はスネ夫たちを従わせてご満悦、という構図だ。以上のことを考えると彼は、戦争における強制的な動員、ひいてはそれに伴う思想的な統一に対して警鐘を鳴らしていたのではないかと考えられる。

#### 4 共生への道

戦争をきびしく批判する一方で、自由のための闘争は否定しない。それも、第三者の介入なしに、自身の力で自由を得ることが重要だと藤本は考える。『エスパー魔美』「学園暗黒地帯」(注8)で高畑くんが言論の自由を求め(勝てないことを悟りつつも)立ち上がったのは、その最たる例と言えるだろう。『宇宙小戦争』(注9)も、ラストでピリカ市民が団結し、ギルモアを将軍の座から引きずり下ろす。自分の意志で行動を起こすべきだとしているのである。

彼はまた、共生という方法を提案する。『竜の騎士』(注10)では、隕石の衝突によって地上を追われる竜人たちに、ドラえもんが地底世界を提供した。「宇宙船製造法」(注11)においては、漂流した惑星で独裁者と化した堂毛を皆で打倒した後、彼は頼もしい仲間となる。つまり、自由を手に入れた後、それまでの体制の者を(できるだけ)受け入れてこそ平和が生まれるのだ。

#### 結論

戦争体験者として、戦争は恐るべきものであり、二度と起こらないことを藤本は願った。合わせて、それぞれ異なる思想を互いに受け入れて共に生きることが理想だとも考えている。その思いで彼はさまざまな作品を残したのだ。

しかしその一方で、「人それぞれの考えが違うのだから、対立するのは仕方がない。」と、合理的な彼は考えていたのだろう。それでも、何とかお互い協力して生きることが出来ないだろうか。次の言葉には、理性と願望の狭間のもどかしさが表れているのかもしれない。

「人間って何千年たっても同じことやってんだな」(注12)

#### おわりに

もともと「ドラえもんの道具で一番凶悪なものは何だろう」と思って調べていたのが、いつのまにかこんな壮大な内容となってしまった。なぜだろう? ……結局のところF先生の本当の気持ちは誰にも分からない。ただ、本人の映し鏡でもある作品たちを通して、考えさせられることは非常に多かったな。そんな思いが残っている。今

回は F 先生に限って考察を進めたが、次は㉠先生にもスポットを当ててみたいものだ。

(注)

1. 中野晴行監修 (2014) 『平和をわれらに!』, 小学館
2. 「超兵器ガ壱號」……『藤子・F・不二雄 異色短編集③ 超兵器ガ壱號』  
「マイ・シェルター」……『藤子・F・不二雄 異色短編集① 創世日記』  
「カンビュセスの籤」……『藤子・F・不二雄 [異色短編集 3] 箱舟はいっぱい』  
「ある日……」……『藤子・F・不二雄 [異色短編集 4] パラレル同窓会』 に収録。
3. 『藤子・F・不二雄大全集 少年 SF 短編 (3)』「ボクラ共和国」より。同様の意見は、『ドラえもん』「ご先祖さまがんばれ」でも見られる。
4. 『T・P ぼん』スペシャル版第 3 巻収録。
5. 『藤子・F・不二雄 [異色短編集 2] 気楽に殺ろうよ』に収録
6. コロコロ文庫『エスパー魔美』第 5 巻, 「思い出を運ぶハト」より。魔美の父親が少年時代 (戦時中) に、クオーターというだけでいじめられた。
7. てんとう虫コミックス第 15 巻収録
8. コロコロ文庫『エスパー魔美』第 4 巻収録
9. 『大長編ドラえもん 6 のび太の宇宙小戦争』
10. 『大長編ドラえもん 8 のび太と竜の騎士』
11. 『小学館コロコロ文庫 藤子・F・不二雄少年 SF 短編集 = 1』収録。
12. 『T・P ぼん』スペシャル版第 2 巻, 「武蔵野の先人たち」より。古代の戦争を体験してきた凡が、フォークランド紛争のニュースを見てつぶやく。

〈参考図書〉

- ・ 浜田祐介 『藤子・F・不二雄論』(2001), 文芸社
- ・ 筑摩書房編集部 『ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉 藤子・F・不二雄 —— 「ドラえもん」はこうして生まれた』(2014), 筑摩書房
- ・ 藤子不二雄㉠, 藤子・F・不二雄 『藤子不二雄㉠ 藤子・F・不二雄 「二人で少年漫画ばかり描いてきた」』2010, 日本図書センター